

講座⑭日本仏教の歴史-仏教伝来から国家仏教の形成まで-

第1講義	仏教公伝：日本に仏教はどのようにして伝わったのか
日本には、仏教が伝わる以前から、自然にある様々なものに神として敬ってきました。そのような中で、中国や朝鮮半島との交流を通じて、仏教が日本に伝えられます。『日本書紀』では552年に百済から仏像などが献上されたと記されていますが、他の文献では538年とされています。初回は、仏教伝来の様子を見ていきます。	

第2講義	仏教の受容：日本仏教のはじめ
仏教伝来の初期、仏は「異国の神」「客神」と表され、日本古来の氏神信仰と同じようにみなされていました。しかも、純粋な信仰というよりは、豪族間の政治的対立の手段として利用されました。特に物部氏と蘇我氏との対立は激しく、仏教にも影響を与えます。最終的に蘇我馬子が勝利し、仏教を保護する政策が強化されていきます。	

第3講義	仏教の展開：豪族と聖徳太子
仏教は、人々の純粋な信仰の対象というよりは、豪族間の政治的対立の手段として利用されました。特に物部氏と蘇我氏との対立は激しく、仏教にも影響を与えます。最終的には物部守屋との戦いに勝利した蘇我馬子が、勢力拡大の一環として仏教を保護する政策をとったことにより、仏教が拡大していきます。聖徳太子も蘇我氏の縁者として関わりを持ちます。	

第4講義	聖徳太子の仏教観：「和国の教主」
仏教を人々の生き方を導く教えとして捉えたのが聖徳太子です（当時は厩戸の皇子、豊聡耳の皇子などと呼ばれていました）。三宝（仏・法・僧）を敬うなど、仏教思想を政治理念として反映させたとされています。日本における最初の仏教者として「和国の教主」とも讃えられている聖徳太子の仏教観を見ていきます。	

第5講義	国家仏教の形成：「国家のための仏教」
律令体制が確立されると、仏教は「国家のための仏教」として制度化され、東大寺や国分寺などが建てられ、「鎮護国家」を目的とした仏教と化していきました。国家の管理下に置かれた仏教は徐々に形骸化していきますが、仏教再建のために渡来してきた鑑真が受戒制度の整備を担ったことで、日本仏教は立て直されていきます。南都仏教の特徴を見ていきます。	

第6講義	現地講義：叡福寺参詣
聖徳太子ゆかりのお寺である叡福寺を参詣します。叡福寺は、聖徳太子と、母である穴穂部間人、妃の膳部菩岐々美郎女の三人の廟所です。空海や親鸞、日蓮といった人達も参詣したと言われています。聖徳太子信仰の一端をうかがってみたいと思います。	